

驢馬とせし事、太平廣記などにあるを取合せて、好事の者描し成べし、

〔今昔物語 二十六〕美作國神依獵師謀止生贄語第七

年來飼付タリケル犬山ノ犬ヲ二ツ撰リ勝リテ、汝ヨ我ニ代レト云ヒ聞セテ、勲ニ飼ケルニ、山ヨリ密ニ猿ヲ乍生捕テ持來テ、人モ無所ニテ役ト犬ニ教ヘテ噉セ習ハス、本ヨリ犬ト猿トハ中不吉者ヲ、然カ教ヘ習ハスレバ、猿ダニ見レバ飛懸テハ噉殺ス、○又見ニ字治拾遺物語十

〔長門本平家物語 八〕猿眼の赤髭なるが、もえ黄糸をどしの腹巻鎧に、白柄の長刀持ちたりける

が、○中略 信つら太刀をさげて丁と合す、二の太刀をうたせず、むすくとくんで、此男を左の脇にか

いはさみて、右の手にて太刀を打振りて、出羽判官は是をば見候はぬかや、○中略 信つらにさき

ざまに追立られて、逃ちりたりける下部ども、まかげをさして見けるが、さる眼の赤髭のさう

にはよらざりけりといひあひければ、誠にかなしげなる顔をもちあげて申けるは、まさる犬

まなこにあひぬれば、かなはぬぞかしと申けるぞおかしかりける、

〔太閤記 四〕石動山由來之事

信長公能考がへつ、延暦寺累年法威に驕り、惡逆多かりしかば、焼亡し給ひてより、内裏仙洞の玉殿も立直り、攝家清花等も舊例に粗立かへりぬるやうに有しなり、然則延暦寺は王城之鎮守と云傳へ侍りしは妄語也、吁あさましかりし聖德太子之用ゐなり、此屬は皆一犬吠虚萬犬傳實と一味之淺智なるべし、

〔渡邊幸庵對話〕予は左様の事不存、總て押立たる尙齒の會、此度ともに日本に三度とかや云へり、左もあるか不知、連衆の年數に限り有餘りは不宣、不足はならぬ事といへり、年齢共詩か歌かに達し、其うへ手蹟も入なり、今の作を自分に書く故、世にむく犬の如くに年計り寄りたる、とならず是を撰ゆへに、古今稀にある事といふか、